

二〇二五年 十二月六日

入学試験問題

国語

I

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

1

から

16

までにマークせよ。

感想文とは「生活の中の直接の体験や、自己の見聞、読書、視聴したことについて、自分の感じたこと、思ったことを書き表した文章」だと定義されている。感想文を書かせる目的は、「生活の中で経験する事象をよくみつめ、判断し、感じたり考えたりしたことをまとめて表現する能力を養う」こと、それは最終的に「事象に対する認識力、判断力、思考力、洞察力、想像力、感受性を高める」ことにつながると作文の指導書で述べられている。感想文は、認知・思考・感性・態度の全方位的な能力の育成を目指していることが分かる。

この定義が示すように、日本の初等教育・中等教育において「感想文」は極めて多様なことから対象に日常的に書かれている。たとえば、日本の作文の定番となっている、本の読後感を書く「読書感想文」と、修学旅行や運動会などの特別活動が行われた後に書く「行事感想文」（卒業文集もこれに含まれる）、社会見学や体験学習などを行った後の「見学感想文」、見学の対象が美術館や映画などの場合の「芸術鑑賞感想文」、各教科でひとまとまりの学習が終わった際に何を学んだかを書く「学習感想文」、与えられた課題を調べて感想を述べる「調べ読み感想文」、学校生活、家庭生活、社会生活について与えられた課題で書く「感想文」がある。これらの名称が示すように、基本的にあらゆる対象を扱う、日本の学校教育における「書き方の基本型」であり「万能の書く様式」となっている。それだけに、目的が明確にされず教師のバク然とした指示によってかなりの頻度で書かれているという課題も指摘されている。

このように、書く対象によって様々な名称がつけられている感想文だが、書く様式としては共通の型がある。序論で書く対象の背景と書き手が対象に対して持っていた感想（理解・知識・考え・感情）を書き、本論で対象を通した書き手の体験を述べ、結論で体験後の感想を述べる三部構造である。体験の前後での書き手の気持ちや考えの変化を感想という形で述べさせる根底には、体験を通して何を学んだのかを書く、つまり体験を通した自己の成長の軌セキを描かせ、その体験を今後

どう自己の行為や生き方に生かすのかを考えさせる目的がある。読書感想文はその典型であり、読書によって書き手のものの見方や考え方がどう変わったのかが感動をもって書かれており、それが読み手に伝われば読書感想文は成功である。

ここで感想そのものの質を保証するのが「カ」をもって書くこと、つまり「自分の生活や生き方とどう関わるのか」という視点を持つことである。それがないと平板な作文になりやすい。構成においても、本の内容や体験の一部始終をだらだらと書いたり、見聞きしたことを網羅して、それぞれについて感想を述べたりする網羅型にはしないで、「自分との関わり」と「自己の変化」という視点から焦点を絞って三部構成で書くことが重要だと指摘されている。

このように体験を切り取ってひとつのストーリーとして構成するには、〈起―承―転―結〉が効果的で、特に〈転〉の部分で驚きが表現されると書き手の変化が伝わりやすい。もともと漢詩の構成法として日本に伝わった〈起―承―転―結〉は、物語のレトリックだと受けとめられているが、日本語による多様な語りを構造化する唯一の組織原理であるとされ、感想文にも効果的である。感想文の目的は自己の成長を物語ることなので、どのような題材・主題を扱っても展開的記述となりやすい。そうした展開の記述に変化をつける役割を果たすのも〈起―承―転―結〉である。四コマ漫画はこの型の典型例である。

個人の認知・思考・感性・態度の成長を描く感想文には別の機能があり、それは学校で感想文を書く実践の中に見つけることができる。学習の成果を自己の成長の結果として表現する時、書き手のものの見方や考え方を変化させるのに他者の力を借りることが重視されている。なぜ他者が重要なのかといえば、他者の多様な考えや価値観に触れることが自己の見方・価値観を考え直す機会を与えるからである。

キ 国語では、学級全体でテキストの読解を行い、それぞれの読み取りを発表させて多様な見方・考え方があることに触れさせる。ク 、答えが一義的（ひとつ）に決まらない主人公の意図を問う質問がよく投げかけられる。主人公の意図を読み解く手がかりとして、主人公の言動とともに場の状況や自然の描写に注目させ、主人公になりきって考える

方法が採用されている。主人公の意図の解釈には、解釈する者の価値観が反映されやすく、解釈に紐ひもづいた児童生徒たちの多様な価値観が示されるからである。

ケ 初等教育の読解では、読みの正解を得ることよりも、多様な価値観について意見を言い合うことで、教室という小さな共同体に参加させることをより重視している。読解の授業は、多様な子どもが集まる教室を「相互無関心」を許さず、「協力と相互交換」を迫る空間にする」と小学校の授業分析を行った注一 桒寄志保は指摘している。

国語教育における文学の取り扱いを歴史的に分析した注一 幸田国広によれば、かつて文学の鑑賞によって行われた人間形成は、一九八〇年代以降物語の「正しい読み」を目的とする「読解」に重点が移ることで、「登場人物の心情の変化を場面の展開に即して読み取る授業が一般化し」、この定型化された正しい読みの方法と徳目が結びつくことで国語教育は「隠れた道徳教育」を内に抱え込こむことになったという。なぜ「隠れた」道徳教育なのか。それは、登場人物の状況に身をおいて気持ちを察すること、つまりひたすら登場人物に共感する一方で、善悪の基準や行動規範は、教師によって明示されないからである。それは児童生徒が読みの共同作業の中で個人的につかみ取り、感想文で表明するものである。B 学級での読みの体験を自己の体験に関連づけて感想文を書くことにより、解釈の共同作業は再び個人に投げ返されて深化を遂げる。しかもこの変化は二度起こることが期待されている。お互いの意見を聞き合あって異同を確認してから感想文を書かせ、書いた感想文を発表させて友だちの作品との異同についてさらに考えさせるのである。感想文を書くことは、読解の一連の体験を通した読みの変化や獲得した価値観、思いもよらなかった他者の価値観を内省的に振り返らせる機能を持つ。

感想文で期待されているのは個人の体験・感情・生き方を社会の構成員である他者と共有しうる「共通感覚」として表現すること、つまり「問主観」——個々の主観が他者との相互の修正を経て、複数の主観の間的一致を見ること——の表現として提示することにある。ここでは、普遍的・絶対的な倫理というよりは、共同体を成り立たせる親切や慈あし、譲り合いといった「利他」の考えに基づく「善意」が問主観と道徳を形成する。この問主観が成立した時、ある場面における個人の感

情と他者の感情のあり方が一致した時には共感が生まれ、ズレが生じた時には、学級という小さな共同体の中で「感想を言い合い」、「友だちの意見によって自己の意見が変わる」ことでズレを調整する。この時、教師が支配的な意見を強要したり、強制的に変わらせたりすることは極力避けられ、読解を学級の共同作業に委ねて多様な感情の持ち方や価値観に触れさせながら、それらをストックとして児童生徒に蓄えさせ、身の振り方を考えさせるのが社会領域の特徴である。しかもこの過程を通して得た意見は、自分で選び取った自主的なものと児童生徒は認識する。

こうして獲得された道徳観は社会生活のあらゆる場面で発揮され、社会秩序の維持に貢献する。個人の中に住み着いた他者の目を通して状況を把握し、その場に合理的な行動——この場合は、共感が得られる行動——を取れるようになるのである。「あなたはどうか感じるか、思うか」という「あなたの気持ち」を常に問われ、書き、他者と確認しあった体験が、社会領域に特徴的な思考法を形成する。それが他者になったつもりで感じ、他者の意を汲み取って、自らの身の振り方を考える思考法である。それは共感を媒介^オにして行われる。

他者の置かれた状況に自己を置き、他者が五感を通じて感じているであろう感覚を自己も感じることににより、よりリアルに他者の苦しみや喜びを感じることができる。そして他者の思いや期待をまさに自分のこととして感じることに〈共感〉によって、他者の期待に応える適切な行為を推測することが可能になる。

道徳の起源は、共感を通じて他者の苦しみや喜びを理解することであるとは、古代ギリシアのアリストテレスから現代の哲学者にも共通する普遍的な認識だが、こうした共感の感覚を養う訓練に、感想文は大きな役割を果たす^D。心が動く契機となった場面に焦点化して書く感想文の構造は、まさに感情が喚起された「場に注目させ」、その場と自己の感情の相互作用を道徳的な感情にまで高める一連の過程を、書く過程に体现させているのである。

(渡邊^{わたなべ} 雅子 『論理的思考とは何か』一部変更)

- 注一 桮寄志保……(生年不詳) 日本の教育学者。専門は教育方法学。
- 注二 幸田国広……(一九六七) 日本の教育学者。専門は国語教育史。
- 注三 アリストテレス……(前三八四～三二二) 古代ギリシアの哲学者。万学の祖といわれる。

問一 傍線部アからオまでのカタカナ部分と同一の漢字を用いる熟語をそれぞれの選択肢の中から一つ選び、その記号を解

答欄 1 から 5 までにマークせよ。

1	ア	ドウ察	①	指ドウ	②	ドウ窟	③	ドウ揺	④	勘ドウ
2	イ	バク然	①	バク芽	②	バク府	③	束バク	④	砂バク
3	ウ	軌セキ	①	免セキ	②	懐セキ	③	朝セキ	④	痕セキ
4	エ	慈ヒ	①	ヒ嘆	②	ヒ小	③	可ヒ	④	逃ヒ
5	オ	媒カイ	①	カイ律	②	カイ拓	③	仲カイ	④	旋カイ

問二 空欄 カ に入る語句として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

6 にマークせよ。

6 ① 客観性と具体性

② 当事者性と切実性

③ 日常性と主観性

④ 緻密性と第三者性

問五 傍線部Bに「学級での読みの体験を自己の体験に関連づけて感想文を書くことにより、解釈の共同作業は再び個人に投げ返されて深化を遂げる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 9 にマークせよ。

9

① 教師によって示された道徳規範を取り入れた上で自分のものの見方を内省することで、感想文の質を高めることができる。

② 多様な価値観に触れることで他者の目が内在化し、自己の体験を振り返る際に以前とは異なる視点で物事を考えられるようになる。

③ 教室では他者の体験談に共感する姿勢が強く求められるため、そうした活動を通じてより多くの共感を集められる感想文が書けるようになる。

④ 級友とテキストの解釈を披露し合う過程で自身の読みの精度を意識するようになり、そうすることで思考や感性を研ぎ澄ますことができる。

問六 傍線部Cに「この過程を通して得た意見は、自分で選び取った自主的なものと児童生徒は認識する」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 10 にマークせよ。

10

- ① 多様な価値観に触れる中で自分の意見が変化していくが、それは無意識的な変化であるために他者の影響を受けていることに気が付かないから。
- ② 日々の学校生活において社会秩序の維持に役立つ価値観が植え付けられているにもかかわらず、そのことを見抜いている生徒はいないから。
- ③ 教師の価値観に合致する意見しか認められないが、そこへの誘導が巧妙であるために自分で自由に選び取った意見だと確信するから。
- ④ お互いの意見のズレを調整していく過程においては特定の価値観の強要は行われないため、生徒は主体的に獲得した意見だと自覚するから。

問七 傍線部Dに「心が動く契機となった場面に焦点化して書く感想文の構造は、まさに感情が喚起された『場に注目させ』、その場と自己の感情の相互作用を道徳的な感情にまで高める一連の過程を、書く過程に体现させているのである」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- 11
- 11
- ① ある体験によって喚起された感情を、同じ体験をした他者の感情とすり合わせていく中で共通感覚が生じ、そこから道徳観が形成されていく過程が感想文に記されるといふこと
 - ② ある場面において喚起された自己の感情に意識を向け、その中から道徳的に容認しうる感情だけを拾い出していく作業を経た後に、自己の変化を感想文として書き表すといふこと
 - ③ ある状況において心が動かされる経験をした際に、そこにふさわしい感情は何なのかということを経験が明示し、それを感想文にまとめさせる中で道徳観を会得させるといふこと
 - ④ ある感情が喚起された場とそこでの自分の内面を振り返りながら感想文を書くことによって、道徳的に正しい行動がとれるような安定した精神状態の維持が期待できるといふこと

問八 本文の内容に合致するものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

12

12

にマークせよ。

① 読書感想文を書く際には登場人物の心情について考えることが必須となるが、そこに徳目を絡ませることにより、特定の道徳観が生徒に共有される。

② 国語教育では主人公の言動の意図を考えさせるために主人公になりきる訓練を行うが、その過程で共通感覚が養われ、読解の精度が高まっていく。

③ 起承転結という同じ構成で自身の体験を書かせることにより、個々人のもの見方や考え方のズレが解消され、他者理解に欠かせない共感が生み出される。

④ 感想文には書き手の価値観が強く反映されるため、他者の感想文を読むことで自身の価値観が少しずつ修正されていき、やがて問主観の形成へと至る。

問九 筆者の主張について説明した次の文章を完成させるよう、各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を

解答欄 13 から 16 にマークせよ。

感想文は個人の体験や感情を 13 という共通感覚として表現することを目指すものであり、そのプロセスを通じて養われた共感が他者理解を促進し、 14 が形成されるが、その基となっているものは 15 ではなく、共同体を成り立たせている 16 である。

- | | | | | |
|----------|--|--|--|--|
| | 16 | 15 | 14 | 13 |
| ⑧ 指導書 | ④ 学習成果 | ③ 間主観 | ② 価値観 | ① 善意 |
| ⑦ 支配的な意見 | ⑤ 絶対的な倫理 | ⑥ 道徳観 | | |

II

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

17

から

29

までにマークせよ。

私たちの脳は様々な方法で、周囲から受け取る情報をコストカットしながら、大体の感じで周囲の物事を捉えている。だから大きな変化にはすぐに目が向いても、小さな変化には目が向きにくい^A。そして目が届いていないところで積み重なった小さな変化は、いつか大きな変化になっている。その大きな変化は確かに起こっていても、その変化に気づかなければ私たちは情報として受け取れないのである。

情報とは変化であり、変化を認識するから情報が生まれる。ずっと同じ状態のものは情報を生みださないのだ。白い壁にずっと目を向けていると、自分が見ているのか見ていないのか分からなくなる。ずっと肌に触れている腕時計は、次第に触れられている感覚が失われ、つけていることを忘れる。それが変化するからこそ、意識を向けることができるのである。

別の言い方をすれば、変化とは差異である^B。たとえば「チェッカーシャドウ錯視^注」では、そのマス目が明るいのか暗いのかは、隣接するマス目とのコントラストで判断される。同じ色であってもコントラストによって、受け取る情報が異なるのである。

これは空間的な変化であるが、時間的な変化もコントラストである。それは以前の状態と今の状態とのコントラストである。このコントラストが急激で差が大きいほど、私たちはまなざしを向ける。髪を切った時の変化は、前の状態とのコントラストが大きいのですぐに気づくが、髪が伸びていく変化はコントラストが小さく分かりにくい。だからある程度時間が経たないと気づかないのである。

マジシャンはこうしたコントラストを利用して錯覚を生みだす。つまり、「変化の操作^C」をしているのである。少しずつ何かを変化させているのであるが、その変化は目立たないように小さく抑えられている。それを自然に連続させて積み重ねていくことで、急激に大きな変化へと変える。そしてミステイレクションによって、その途中の変化の因果関係を見せず

に、最初と最後だけにまなざしをつないで編集するので、私たちはいきなり変化したように見えて驚くのである。小さな変化を慎重に操作し、注意を管理しながらまなざしをデザインすることで、マジシャンは錯覚を生み出すのだ。

D こうした錯覚は物事の因果関係を推測できる大人の目にしか通用しない。五歳以下の子供ではまだ物理法則や因果関係がよく分かっていないので、魔法がかかりにくいのである。まだまなざしが固定されていない子供には、高度で複雑なマジックほど逆に不思議には感じられない。大人は一つ一つの因果関係を理解しているからこそ、一つ一つのアクションには矛盾がないのに、結果として最初と最後の状態に矛盾があるから驚くのである。それは「常識とはこうである」という認識がないと成立しないのだ。

E ア 私たちが見ている現実や常識は、もともとある種の錯覚だらけなのである。通常私たちが錯覚に陥るのは、物理的な現実と私たちの感覚との間にギャップが生まれた時である。イ 人間は最初から物事をニュートラルに見ているわけではなく、様々な知覚の落とし穴や、頭の中の想像力、そして私たちが抱く願望によって、最初からミステイレクションされた風景を見ている。

ウ ある目的や意味などに集中している時は、たとえば大きな変化が起こっていても見えないのである。

マジシャンは大きく二つの方法で私たちのまなざしをデザインして、幻覚の風景を見せる。一つは物や場所に、あらかじめタネやからくりを用意しておくという「仕掛け」。もう一つは物や場所には全く何も仕込んでいないが、マジシャンが手や言葉を使って私たちを誘導する「技術」である。F この仕掛けと技術を多種多様に組み合わせ、マジシャンは目の前の風景を一瞬にして違うものにしてしまう。

これまで見てきたように、人間のまなざし、特に私たち大人の眼は子供以上に想像力が誘導された状態で世界を見ている。マジシャンはそれを逆手に取って、より不思議な現実へと私たちを連れていくのだ。私たちは実際に目にしたものしか信じないと言うが、見たものですらまるであてにならないという真実を、こうした手品は浮き彫りにする。もしマジシャン

がするようなまなざしのデザインを悪用すれば、私たちはなすすべもなく様々なことを信じ込まされるだろう。

私たちのまなざしには、推論やパターン認識、非注意による見落としだけでなく、様々な想像力の誘導が最初から働いている。先入観や願望、暗示や記憶の書き換え、確率や因果関係への信頼など、様々な想像力が含まれ、私たちのまなざしは最初から曇っているのである。

世にある様々な詐欺や悪事、そして洗脳やマインドコントロール、情報の隠蔽や陰謀などは、まさにこうしたまなざしの特性を突いて秘密裏にデザインされることで行われる。私たちはそれに気づかずに、まことしやかなものを真実であると思いついでいる場合も少なくはない。^G常識的な大人の眼を持っている人ほど、そして過去の経験や知識が豊富で、物事をニュートラルに見ていると思っている人ほど、盲点を突かれる可能性がある。

というより、社会はそれぞれの時代において常識という名の壮大な想像を共有している。そうすることでうまく治められていると言う方が真実かもしれない。仕掛けの有無にかかわらず、人は勝手に幻想を共有するのである。それがうまくいっている時は問題がないように見える。しかし状況が変化し、その幻想がほころび始めているのに、未だにまなざしとその幻想に固定されたままであると問題は深刻化していく。

嘘のように見える不都合な真実と、真実のように見える都合のよい嘘があった時、人は甘く優しい嘘の方を信じがちである。たとえ真実の姿が見えてきたとしても、それが都合の悪いものであれば私たちは真実の方を幻想であるとして、まなざしを背ける。それが普段の生活の中で積み重なることで、私たちはマジシャンがいるわけでもないのに、勝手に錯覚をしてまなざしを固定化させていく。

そこから抜け出すためには、風景に時々変化を与える必要がある。まなざしをデザインすることで、あえて別の幻覚を書きし想像力に変化を与える。私たちが持っている幻覚に対して、^H幻覚をもって現実をあばくこと。それによって想像力を広げ、現実を変化しうるものであることを見やぶるのである。

(ハナムラ チカヒロ 『まなざしのデザイン』一部変更)

注一 チェッカーシャドウ錯視・・・色の濃淡が異なる正方形のマス目が交互に並んだ模様の上で、実際は同じ明るさの領域が、影の影響などにより異なる明るさに見える錯視現象。

問一 空欄 に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選

び、その記号を解答欄 にマークせよ。

- ① ア それでも イ それゆえ ウ しかし
- ② ア したがって イ もちろん ウ ところが
- ③ ア つまり イ しかし ウ 特に
- ④ ア 要するに イ たとえば ウ ただし

問一 傍線部Aに「小さな変化には目が向きにくい」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 18 にマークせよ。

18

- ① 人間の脳は、処理すべき情報量を抑え、効率よく世界を把握しようとするため、重要度が低いと見なされるわずかな差異には注意が向きにくいから。
- ② 人間の脳は、現状との違いが少ない事柄よりも、新しい情報や予期せぬ出来事を優先して処理する傾向があるため、継続的な変化を捉えにくいから。
- ③ 人間の脳は、日常生活における慣れや習慣によって、周囲への注意が散漫になりがちであり、新しい情報を取り込もうとする意識が生じづらいから。
- ④ 人間の脳は、変化を認識する際に過去の経験との比較を行うが、小さな変化は比較対象として記憶に残りにくく、多くの場合見過ごされやすいから。

問三 傍線部Bに「変化とは差異である」とあるが、それはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 19 にマークせよ。

19

- ① 変化とは、物事が時間の経過とともに絶えず移り変わることであり、その速度が速いほど、人間はまなざしを向けやすいということ
- ② 変化とは、ある状態と別の状態との違いのことであり、その違いがより際立っているほど、私たちは情報として捉えやすいということ
- ③ 変化とは、物事を周囲の環境と比較することで初めて認識される現象であり、周りに比較できる対象がない限り変化に気づけないということ
- ④ 変化とは、個々人が持つそれぞれの判断基準に照らして観察されるものであり、こうした主観的評価が情報の獲得を支えているということ

問四 傍線部Cに『変化コントロールの操作』をしているのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

20 にマークせよ。

20

① 観客には気づかれないほど小さな変化を少しずつ積み重ね、最終的に大きな変化が生まれたように見せて、途中の因果関係を隠すこと

② 観客の注意を特定の部分に集中させることで、現実には起きていない変化をまるで実際に起きているかのように巧みに錯覚させること

③ 観客が予想できない不規則なタイミングで、物理法則を無視するかのような急激な変化を不意に引き起こし、大きな驚きを与えること

④ 観客の思い込みや常識を利用することで、実際にはほとんど変化していない複数の事象をつなぎ合わせて大きな変化だと錯覚させること

問五 傍線部Dに「こうした錯覚は物事の因果関係を推測できる大人の目にしか通用しない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

21 にマークせよ。

21

① 大人は、子供とは異なり、現象の背後にある法則性や合理性を探索する知的な欲求を持ったため、マジックが見せる非合理的な結果に対して、自身の理解を超えた「不思議さ」をより強く感じ取り、その感覚自体が錯覚体験を深めるから。

② 大人は、子供とは違い、経験的に構築されてきた「常識」という安定した枠組みに依拠して世界を解釈するため、その枠組みから逸脱するように見える事象に対して生じる認識上のずれこそが、マジックの驚きを生む源泉となるから。

③ 大人は、子供と比べて、社会的な経験を積む中で、言葉によるコミュニケーションや論理的な整合性を重視するようになるため、マジシャンの洗練された口上や演出によって思考が誘導され、視覚的な矛盾を見落としてやすくなるから。

④ 大人は、子供よりも、対象への集中や目的意識によって特定の情報に注意が向かいがちで、因果関係を過剰に読み取ろうとする「まなざしの特性」が強く働く傾向にあるため、マジシャンによる意図的な誘導の効果を受けやすいから。

問六 傍線部Eに「私たちが見ている現実や常識は、もともとある種の錯覚だらけなのである」とあるが、それはどういう

ことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 22 にマークせよ。

22

- ① 人間は、個人の想像力や願望によって「まなざし」が曇りやすく、そうして認識される現実は、マジックが見せる幻覚と同様に、客観的事実と常に食い違うということ
- ② 人間は、物理的な現実をありのままに受け入れているつもりでも、実際には脳が情報を取捨選択し、自分の意図に反した仕方でも物事を受け止めてしまうということ
- ③ 人間は、物理的な現実の不確かさや矛盾に直面した際に、自らの想像力や願望を補完的に用いることで、あたかも現実であるかのような世界像を構築すること
- ④ 人間は、知覚の特性や無意識の思い込み、あるいは願望や先入観といった多様な要因によって、現実をありのままではなく、歪んだ形で認識しているということ

問七 傍線部Fに「この仕掛けと技術」とあるが、「仕掛け」と「技術」とはそれぞれどのようなものと考えられるか。そ

の説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 23 にマークせよ。

23

① 「仕掛け」とは物理的なトリック、「技術」とは心理的なトリックであり、マジシャンはこれらを複雑に組み合わせて観客を欺く。

② 「仕掛け」とは観客には見えない道具、「技術」とは観客の注意を逸らす話術であり、マジシャンはこれらによって常識を覆す。

③ 「仕掛け」とは事前に用意された物的要素、「技術」とは身体や言葉による心理的操作であり、マジシャンはこれらを用いて幻覚を見せる。

④ 「仕掛け」とは大掛かりな舞台装置、「技術」とは巧みな手先の早業であり、マジシャンはこれらを駆使して不可能を可能に変える。

問八 傍線部Gに「常識的な大人の眼を持っている人ほど、そして過去の経験や知識が豊富で、物事をニュートラルに見て

いると思っている人ほど、盲点を突かれる可能性がある」とあるが、それはなぜか。本文全体の論旨を考慮に入れ、その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 24 にマークせよ。

24

① 経験や知識が豊富な人は、自らの判断力に絶対的な自信を持っていることが多く、他者からの忠告や異論に耳を傾けようとしないため、詐欺や洗脳、マインドコントロールといった特殊な状況において、その慢心が裏目に出やすいため。

② 常識や経験は、社会生活を円滑に送る上で不可欠なものであるが、変化の激しい現代においては過去の成り功体験が通用せず、むしろ新たな状況への適応を妨げる足枷あしかせとなり、結果として、現状を維持しようとするバイアスに陥りやすいため。

③ 物事を偏りなく見ようとする態度は、一見望ましく思えるが、実際にはあらゆる事象に対して判断を保留することになり、その結果、状況の変化にうまく対応できず、巧妙に仕組まれた悪意ある情報操作や陰謀論に対して脆弱ぜいじやくになるため。

④ 豊富な経験や知識は、それ自体が強力なパターン認識や推論の枠組みを形成し、それに合致しない情報を無意識のうちに見落としやすくさせ、自らを中立的と過信する姿勢を介して、かえってその枠組みへの無自覚な依存を一層助長するため。

問九 傍線部Hに「幻覚をもって現実をあばくこと」とあるが、それはどういうことか。本文全体の論旨を考慮に入れ、そ

の説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 25 にマークせよ。

25

① 人間が「まなざし」の曇りや「想像力の誘導」から完全に自由になることは不可能であるという前提に立ち、固定化された認識を相対化するために、あえて別の多様な解釈や視点を導入し、認識の柔軟性と現実の多面性を回復しようと試みること

② マジシャンが利用する「まなざしのデザイン」の手法を逆手に取り、人々が信じがちな「都合のよい嘘」よりもさらに魅力的で説得力のある「幻覚」を意図的に作り出し、社会全体に広めていくことで、最終的に人々をより良い方向へと導くこと

③ 現実世界から目を背け、いたずらに個人的な幻想の世界へ閉じこめるのではなく、自らが抱える先入観や願望を深く内省し、それらが現実認識に及ぼす影響を自覚することで、より客観的で曇りのない「まなざし」を獲得しようと努力すること

④ 現代社会が共有する幻想がもはや現実から乖離かいりしていることを直視し、その「幻想」を維持しようとするメカニズムを批判的に暴き出すことで、新たな社会常識や価値観を構築するための想像力を人々に喚起し、理性的な判断力を取り戻すこと

問十 筆者の主張について説明した次の文章を完成させるよう、各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を

解答欄 26 から 29 にマークせよ。

人間のまなざしは変化を捉えることで情報を得るが、脳が行う選択的な情報処理のため、微細な 26 の推移は見落とされやすい。マジシャンがミスディレクションを利用して生み出す錯覚は、私たちの認識が 27 に左右されやすく、決して透明ではないことを利用している。社会の 28 でさえ、幻想として機能することもある。こうした幻想から自由になるためには、別の幻想を導入し、現実 29 可能性を自覚することが求められる。

- | | | | | |
|---|--|--|--|--|
| | 29 | 28 | 27 | 26 |
| ① | ④ | ③ | ② | ① |
| ② | ⑤ | ④ | ③ | ① |
| ③ | ⑥ | ⑤ | ② | ① |
| ④ | ⑦ | ⑥ | ① | ① |
| ⑤ | ⑧ | ⑦ | ② | ① |
| ⑥ | ⑨ | ⑧ | ① | ① |
| ⑦ | | ⑨ | ① | ① |
| ⑧ | | | ① | ① |
| ⑨ | | | ① | ① |

MEMO
